

事業名	平成 25 年度能登キャンパス学生教育・活動支援事業「地域課題ゼミナール」 「輪島市内における祭礼取組状況と応援隊受入体制調査」	
実施主体	金沢大学 堀内美緒ゼミ	
活動 形 態	開催場所	輪島市
	活動人数	4 名
	期間	平成 25 年 6 月 14 日～平成 26 年 3 月 31 日
活動概要	<p><調査目的></p> <p>本調査は、輪島市内の集落ごとに祭礼行事の有無を調査し、集落単位での祭礼行事のデータベースを作成することを目的とした。</p> <p><調査方法></p> <p>平成 25 年 8 月 10 日～11 日の輪島市門前皆月山王祭り、8 月 24 日の輪島市門前町久川の祭りに参加し、体験しながら住民への聞き取り調査を行った。次に、祭りの現状と問題点、外部人材の受け入れ意向に関するアンケート票を作成し、輪島市全区長に配布、158 通回収した(回収率は 65%)。</p> <p><調査結果></p> <p>アンケートの結果、キリコや山車、神輿などの出し物を使った祭りを現在でも行っている集落は 53%、出していない集落は 47%であり、出していないところの最も多かった問題点としては「高齢化・過疎化による神輿やキリコの担ぎ手不足」が挙げられ、次いで「集落内での意識の低下」や、「出し物修繕費用が出せない」といった問題が見えた。外部人材の受け入れは、18%が「受け入れたい」と回答したのに対して、46%が「いいえ」と回答し、その理由として「受け入れの方法がわからない」、「面倒を見る余裕が集落にない」などがあることが分かった。</p> <p><今後の方針></p> <p>外部からの人員受け入れによって成功している集落のモデルケースを収集し、受け入れのノウハウを移転、その後は集落で自立的に祭礼を行うための仕組みづくりが課題だと考えられる。</p>	

事業名	平成 25 年度能登キャンパス学生教育・活動支援事業「地域課題ゼミナール」 「ウォーキングツアーでのスマート観光案内の効果検証」	
実施主体	金沢星稜大学 上田卓爾ゼミ	
活動形態	開催場所	珠洲市
	活動人数	16 名
	期間	平成 25 年 6 月 14 日～平成 26 年 3 月 31 日
活動概要	<p>スマート観光案内アプリ SkyWare を利用した実証実験を以下のとおり実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実施日 平成 26 年 1 月 16 日（木）～17 日（金） 2. 実施箇所 珠洲市「岬自然歩道」、「日置フットパス」 3. 案内 珠洲市企画財政課まちづくり相談室 小寺 美和 氏 NPO 法人奥能登日置らい副理事長 大坪 久美子 氏 4. 活動内容 <ol style="list-style-type: none"> (1) スマート観光案内の効果検証（チェックポイント） <ol style="list-style-type: none"> ①道の駅狼煙 ②緑剛崎灯台 ③徳保の千本椿 ④木ノ浦健民休暇村 <p>(活動後の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者に効果的である。高齢者・外国人向けには操作しやすいものが望ましい。 ・スマートフォンは首から下げられ手ぶらで歩けるので良い。タブレットは大きすぎる。 ・ありきたりの情報でもの足りない。情報の追加が必要。 ・灯台の日の出・日の入りの疑似体験ができれば面白い。（例：釧路の夕日記念撮影） ・ARを使って、真冬にヤブツバキを咲かせることはできないか。雪と花の対照は素晴らしいと思う。 ・海食崖や波食台などは木の間から眺めるしかできないので、ARを設定してみてはどうか。 ・スポット案内ではなく、ウォーキングツアーそのものを組み込んでどうか。 ・ウォーキングツアーの中に、エコツアー的な要素を加えても良いのでは。 (6 月海を渡るアサギマダラ、11 月～3 月コハクチョウ、2 月ヤブツバキ、冬の波の花) <p>冬場のウォーキングツアーとして</p> <ul style="list-style-type: none"> ・青森県の「雪国地吹雪体験」のように雪を珍しがめることは、南国の人や外国人に受けるのではないか。 ・風の影響が意外に少なかった。 ・葉が落ちて見晴らしが良かった。 	

(2) まとめ

旅行や観光はガイドブックなどの心理的な確認行為だとも言われている、観光名所の写真を撮ってそれだけで満足して、あとはショッピングに一目散というのもよくある話である。その意味では、スマートフォンによる観光ガイドシステムは画像があるだけに実際の光景と確認行為が同時にできるという利便性がある。さらに情報量はガイドブックよりはるかに大量でしかも軽量。単なる情報だけでなく、AR技術で四季折々の景色・歴史的情報・緑剛崎灯台などでは日の出・日没の情報なども提供すれば、リピーターを生み出せる可能性がある。

事業名	平成 25 年度能登キャンパス学生教育・活動支援事業「地域課題ゼミナール」 「過疎化高齢化に対応した地域環境を活かしたスポーツ・ツーリズムの推進」	
実施主体	金沢星稜大学 池田幸應ゼミ	
活動 形 態	開催場所	穴水町
	活動人数	15 名
	期間	平成 25 年 6 月 14 日～平成 26 年 3 月 31 日
活動概要	<p>1. 穴水町の課題とスポーツ・ツーリズムの推進</p> <p>能登地域は平成 23 年に世界農業遺産「能登の里山里海」に認定され、その地域資源が高く評価されている。しかし、奥能登地域全体の過疎高齢化が進行し、穴水町においても人口 9,738 人と 1 万人を割り、過疎高齢化対策は急務な課題である。平成 23 年に「スポーツ・ツーリズム推進基本方針」（スポーツ・ツーリズム推進協議会）が出され、スポーツを通して地域の活性化に繋げる可能性とその重要性が示された。本ゼミナールでは、平成 25 年度より全町的に示された「健康長寿のまちづくり推進事業計画」を受けて、野外スポーツの視点から、地域環境を活かした地域行事に連動させたスポーツ・ツーリズム推進策について検討を行った。</p> <p>2. 地域行事への積極的参加及びスポーツプログラムの検討</p> <p>文部科学省は「いつでも、どこでも、だれでも、いつまでも」とスポーツに親しむ環境を提供するために、地域のニーズに適した様々な事業を展開する地域住民自主運営によるスポーツクラブ（「総合型地域スポーツクラブ」）の設立を推進している。平成 24 年度、本ゼミナールで提案、開設された「穴水町総合型地域スポーツクラブ準備委員会」と連動させ、積極的に地域行事へ参加しながらプログラムの検討を行った。</p> <p>本ゼミナールでは、地域で実施されている運動・スポーツ・健康に関する事業にも協働参加し、地域住民の方々と直接話をしながら、体力測定やヒアリング調査、そしてスポーツ交流を行った。特に甲地域においては、これまでの継続的連携地域として地域住民の運動・健康・体力調査を実施し、地域としての健康づくりへの課題を明確化した。</p> <p>3. 過疎高齢化地域におけるスポーツプログラムの提案（甲地区を事例として）</p> <p>穴水町には、現在 4 つの公民館があり、各公民館を拠点に穴水町健康クラブの地区メンバーを中心に運動会や健康講座等が開催されており、地域住民の健康の保持・増進を図っている。しかし、参加する住民も固定化しており、地域住民のスポーツに関する意識も「スポーツは特別に行うもの」との認識であり、農村漁村地域での高齢者にとって、日常化にはつながってはいない。そこで、甲地区をモデルとして日常での何気ない様々な行動や年中行事を身近なスポーツとして捉え、日常でのスポーツ意識化を図るため、『かぶと健康・スポーツプログラム』の提案を行った。</p>	

4. 事業評価

若い学生が地域に入るだけで活気が出ており、過疎高齢化により衰退している地域行事においても若いスタッフ人材として期待される。学生の新しい発想や継続的な地域活動により、行事の企画・運営や地域－大学の協働体制の強化につながっている。

5. 学生の声

“私たち学生にとって、今回、様々な機関と連携・協働できたことで、多くの人々の思いを共有できたことから、自分で考え、実践し、その「実行力」を活かして、多くの人々との出会いやゼミナール学生間での議論や相互協力を通して「傾聴力」や「柔軟性」の向上にもつながったものと実感している。”

事業名	平成 25 年度能登キャンパス学生教育・活動支援事業「地域課題ゼミナール」 「再生可能エネルギーの暮らし可能性調査」	
実施主体	金沢大学 木綿隆弘ゼミ	
活動 形 態	開催場所	能登町
	活動人数	5 名
	期間	平成 25 年 6 月 14 日～平成 26 年 3 月 31 日
活動概要	<p><調査目的></p> <p>本ゼミナールは火力発電や原子力発電に代替される次世代の再生可能エネルギーの中でも中小水力発電に注目し、他県より降水量が比較的高い石川県特有の気候を活かしたエネルギーの生産と消費について調査を行った。</p> <p><調査方法・結果></p> <p>まず、石川県がどの程度降水量が高いかを把握するために年間平均降水量で比較をしたところ、世界平均〈810mm〉、日本〈1690mm〉、石川県金沢市〈2399mm〉、輪島市〈2100mm〉となり、石川県各地の降水量は他の地域と比較しても顕著に高い。これは降水した川の水量を利用する水力発電にとって、最適な環境にあり、中小水力エネルギーが豊富に存在していることがわかる。</p> <p>中小水力エネルギーは、他の再生可能エネルギーと比較して、①設備利用率が高い、②耐用年数が長い、③変動が少なく安定しているという特徴を有している。これらの特徴を活かし持続的なエネルギーの供給を可能とすれば、エネルギーの地産地消を実現し、地域の独立電源としての役割を担うこととなる。これにより小水力発電は土木・機械・電気・設備の総合技術、企画・設計・製造・工事・保守・点検など複数の企業が必要となり、結果的に地域産業への波及効果が大きくなる。</p> <p>雨水を効果的に発電へと還元するためには、標高の高さや水路の整備状況などが関係する。本調査では、能登町の 2 地点の用水を対象として、水の運動エネルギーを測り、滑車の仕組みを変えて、最も効果的な中小水力発電の方法について考察した。</p> <p>中小水力発電は独立電源として、電気の通っていない山間部だけでなく市街地や農業用としても期待される。また、中小水力エネルギーを利用した街づくりを地元住民や日本全国にアピールし、豊かな自然ある能登の魅力を発信することができる。</p>	